TAKE FREE

MA・SO・BO通信

2021 7▶8

［寄稿］「今から　ここから始めよう ～空知っ子！集まれ～って今は少しがまん、がまん～」

砂川市地域交流センターゆう　アートコーディネーター　太田　晃正

大変な事は起こります。今迄だって、これからだって。今、地球が大変だ。「天」からは異常気象で大雨、洪水、崖崩れ。「大地」からは大地震、津波。「地上」ではコロナ、パンデミック、バッタの大発生、人種差別のヘイト運動、食糧危機…どうしたんだ地球、人間、みんな、環境破壊が根っ子だろうか。だからといってじっとしていても仕方がない。少しづつでも始めよう、動き出そう。

この時代AI・ITがいつでもどこでも「人」と「人」を繋いでいる？？だからこそ「今」そして「ここ」の大切さが注目される。このコロナ禍でリアルな“空間”“場”の価値は益々高まり必要とされる、体験できる、実感できるそれが砂川市地域交流センター「ゆう」の一つの役割。そんな事で空知の中の小さな劇場の子供達の活動の話をしよう。

砂川「ゆう」は平成１９年（２００７年）１月７日オープン。キーワードは「未来への架け橋」だった。そのメインステージが子供１００名の音楽劇「妖怪達がやって来る」。その時に発足したのが市民劇団「心呂座」。歌やダンスを織り交ぜ「対話の大切さ」「みんなで協力する事の素晴らしさ」等を伝えながらあくまでもプロセス重視の音楽劇です。このエンディングで全員が歌う曲「未来へ」の間奏で満員の客席に問いかけます。「皆さんはこの町が好きですか」「川の流れがいつも聞こえるこの町が好きですか」「おじいちゃん、おばあちゃん。そしてお父さん、お母さんが住み暮らすこの町が好きですか」そして舞台の子供達全員が「僕達、私達はこの町が大好きです」このフレーズで客席全体が涙しました。この舞台の感動から砂川の子供文化がスタートした瞬間でした。市民の多くの方から支えられる環境が生まれました。まさに感動が人を変え、人が町を変えていく。

ゆうの企画事業の中心は子供達への支援、育成です。

現在も活動するチームは

○こども人形劇（おりおん座、れもんソーダ、こひつじ座）
○キッズ落語（ゆう楽亭）
○キッズジャズスクール
○市民劇団（心呂座、一石）
○砂川中学校演劇部
○キッズ紙芝居ラボ

等が日頃から「ゆう」に通い練習をしています。砂川に限らず空知の町々から子供達が参加しています。「人形劇」は矢吹先生（札幌市こどもの劇場やまびこ座）から厚いご指導を頂き、お陰様で小中学生の「おりおん座」高校生の「れもんソーダ」大人の「こひつじ座」も活動を続けて　運営、創造、人形作りをしています。毎年こども人形劇フェスティバルを開催し目標としています。それは地域に残る文化創造への思いがあります。

○「キッズ落語全国大会in砂川」全国から小さな落語家が集まり「ゆう楽亭」で高座に上がり芸を競う、これが楽しい、見事に上手い、この大会の実行委員会が「落語が地球を救うかもしれない」という（笑）ちなみに参加者の最年少は小学２年生でした。将来有望な少年。コロナ禍の今年はスマホ寄席として映像審査をし、新たな方法で開催をしました。一つの試みでした。

○「キッズジャズ」の活動は札幌を中心として全道のジャズチームと地域間交流をしながら活発な繋がりが続いています。それぞれのチームで積極的に活動を広げている子供達がこの表現活動を通して創造する喜びとコミュニケーション能力を高め自分の物語を想像できるように又、それをサポートする市民、大人達がいる広場、空間が「ゆう」の環境だと思います。劇場は演劇や音楽、コンサートをやるだけの場ではなく、もっと多様な可能性を持つ、そしてテーマを語り合い、人を中心において全てのプランが進んでいくのだと思います。

ゆうのロビーに自立する白い扉が置いてあります。「ありがとうの扉」というその扉には落書きのように「ありがとう」とみんなが書いてくれる。もう何千人もの人々のありがとうが重なっています。その扉を楽しそうに出たり入ったりして遊んでいる子供達。「ありがとう」と言葉が子供達に降り注いでいる「ありがとうの扉運動」をやっています。皆さんも砂川に来たらこの扉ををくぐって見て下さい。何か楽しいことが起きる・・・かもね？こんな時こそ、小さなうれしいと発見を膨らませて行きましょう・・・ドスコイ！？

略歴

1945年　横浜に生まれる
1963年　財団法人厚生団
　　東京厚生年金ホール入社
　　（舞台照明担当）
1994年　劇場コンサルタント会社
　　（有）時円プランニングを設立
1998年　財団法人北海道文化財団トータルコーディネーター就任
2006年　砂川市地域交流センターアートコーディネーター就任
　　財団法人札幌市芸術文化財団理事

「私に創る喜びを育んだ中島児童会館　1」 七人の子どもを探す記事　鈴木　喜三夫

一九八四年９月29日の「北海道新聞」に“30年前の笑顔はだれ？”という七人の少年・少女の写真と記事が掲載された。四九年３月にオープンした札幌市中島児童会館のカマボコ兵舎を改良した建物前である。

写真の右側に立つ子と座る子に見覚えがあった。沢田信子と高橋ようこに違いない。ただ私が記事を発見したのはさらに数年も後だったため、新聞社へ連絡出来なかったのが残念。

四七年に小学校教師・小野三男治らを中心に結成された「札幌子供の友会」に奉仕会員として参加した中学生の私は、小野の蔵書を公園などに運び、子どもたちに読書させたり、口演童話や紙芝居の手伝いをした。そのうちに私たちも子どもと一緒に歌を唱ったり、劇を作ったりしはじめた。二人の少女はその活動に力を貸してくれた子どもたちである。

とくに沢田信子はススキノの文房具店の娘で、私がたまたま通っていた西本願寺の日曜学校で「～子供の友会」へ誘った子だ。歌・踊り・劇に表現力を発揮していた。

その「～子供の友会」は、中島児童会館開館記念の子ども会に出演したのをきっかけに、毎月の例会でも会館を使い、正月・クリスマスなどの子ども会などにも積極的に参加し始めたのである。

一九四五年春、絵が好きな軍団少年だった私は、新潟の飛行機の学校に入ったが夏に敗戦。故郷に帰ってきた後、復学も就職も出来ずにいた時に近所の人に勧められ、日曜学校に通った。同時に出版など文化活動を展開していた「新日本文化協会」へもアルバイトで通い、出入りする画家や童話家とも接触が多くなる。また転校した「札幌一条中学校」がアメリカのモデルスクールだったため、活発な文化行事が行われ幻灯劇やオペレッタの創作に関わることとなった。それらと「～子供の友会」での活動が重なり合い、私の文化活動の根幹になる体験だったと思う。

飛行機の学校で上級生たちは、毎日のように飛び立ち敵の軍艦に突っ込んだ。あと半年、戦争が続いていたら私も同じような運命だったろう。それだけに札幌へ辿りついた時、子どもたちに再び同じ体験は決してさせたくないと考えたことは確かだ。そしてその考えが、私の創造姿勢の中に大きな役割を持つことになるのである。

suzuki　kimio
鈴木　喜三夫

PROFILE
一九三一年・札幌生まれ。札幌北高から東京・玉川学園大学へ入学。五六年中退してテレビ作家で活動後、札幌へ帰り五九年専門劇団「さっぽろ」創設。八六年フリー演出家、二〇〇九年「座・れら」を結成、現在に至る。九四年北海道文化奨励賞、〇七年北海道文化賞受賞。〇四年「北海道演劇 1945－2000」（北海道新聞社）上梓。

MA・SO・BO

本　シェルジュ

KONNO MICHIHIRO
今野　道裕　先生
國學院大學北海道短期大学部
幼児・児童教育学科
幼児保育コース　教授

PROFILE
1955年生まれ
高校時代より人形劇活動を始める小学校教員28年を経て2006年～市立名寄短期大学教授2021年～
國學院大學北海道短期 大学部教授
北海道人形劇協会理事
芸術と遊び創造協会会員
日本福祉文化学会会員
北海道教育学会会員
北海道芸術教育の会
ひとり人形劇団「オホーツク風雲ワクワク団n」として活動中
著作：『作ってあそべる製作ずかん～3・4・5歳児の保育に～』
（学研・2013年12月）

本の紹介⑥　『プレイブッキーおみせやさん』

（五味太郎　ほるぷ）

いやあ、これは絵本として紹介していいのかな。大きいんです。しかもつながっていてどんどん広がるんです。絵巻物みたい。五味太郎さんの絵、絵本好きなら誰でも一度ははまったことあるでしょう。あの楽しい絵がぐるっとつながって、お店屋さんいっぱいの輪になるんです。しかも裏も表も！電気屋さんは「雷商会」、ミルクは「牛山牛乳店」など五味さんのユーモアや情報がたっぷり。一つ一つの絵を追って楽しんでもいいし、お店屋さんごっこで遊んでもいい。楽しくないはずがありませんね。絵を離れて、魚釣りの釣り堀として使ったこともあったなあ。

また不思議なことに、小さい子どもをこの絵本でぐるっと囲んであげると、落ち着くみたい。自分のおうちができた気分なのかな。周りを年上の子が走り抜けてもちょっと安心だし。同じシリーズで『どうぶつランド』もあって、こちらは動物園ごっこが楽しめます。古い本ですが、古本屋さんなどで見つけたら、「即買い」おすすめです。

657 美術館からのお知らせ
～657cmのちいさな美術館～

あべ弘士・絵本原画展『氷上カーニバル』

旭川在住の絵本作家あべ弘士さんの絵本原画展を実施します。氷上カーニバルは、札幌市で大正時代の終わりから昭和にかけて行われた冬のおまつりです。雪にとざされた冬の終わりを祝うため、手作りの仮装をして中島公園のスケートリンクでカーニバルをしました。このおまつりは、当時の子どもたちの心に深い感動を残し、児童文学作家の神沢利子さんの作品『いないいないばあや』にも描かれています。人々の生きる喜びが溢れる、美しく楽しい夜の絵本の原画を是非、ご観覧ください。

■期　間：8月3日（火）～10月3日（日）
■時　間：9：00～17：00　　■入場料：無料
■会　場：札幌市中島児童会館・こぐま座内・657美術館

大人向け　こども文化セミナー「まるごと！ひだのかな代～絵本と動物」

札幌在住の絵本作家ひだのかな代さんをお招きして、子ども文化セミナーを開催します。絵本や動物など、絵本制作秘話についてお話ししていただきます。※絵本の販売とサイン会もあります。
（※ひだのかな代絵本原画展　7月31日（土）まで延長）

■日　時：7月31日（土）13：00～15：00
■対象・定員：18歳以上　40名
■参加費：1,000円
■会　場：札幌市中島児童会館

参加申込受付中

【お問い合わせ・申し込み】
札幌市中島児童会館　TEL 011-511-3397
札幌市こども人形劇場こぐま座　TEL 011-512-6886
住所：札幌市中央区中島公園1－1
（地下鉄南北線中島公園駅下車3番出口より徒歩1分）

編集後記

お店屋さんごっこ、人形劇、演劇、ミュージカル、どれをとっても想像力が必要なもの。最近の子ども達や若者には想像力が足りない、次の行動をどうしたらいいのか考えられないと耳にします。もしかしたら、ゲームやPC、スマホに夢中で、対人とのごっこ遊びや自然とのふれあいが減っているのかも知れません。小さい頃から、人とふれあい想像力を豊かにし色々な喜怒哀楽を重ねることで、強い人になれるのかも知れませんね。こんな世の中でもマスクをしながら沢山の人とコミュニケーションを取りましょう。（川村）

発行／札幌市中島児童会館・札幌市こども人形劇場こぐま座指定管理者／公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会